

坂井 春風 「演劇教育の現在と過去」

要旨

「演劇教育」はインターネット記事で取り上げられるほど注目されつつある。この論文では演劇教育の過去と現在を調べ、最終的には演劇をどのように授業に取り入れることができるのかを考え、演劇教育のこれからの展望を考察する。演劇教育には演出や俳優などの演劇人を育てる意味と、演劇を通してコミュニケーション能力を身に付けたり人間性を育てる意味である。この論文では後者を扱う。そもそも演劇とは作者の仕組んだ筋書きに基づいて俳優(演者)が舞台の上で言葉(台詞)・動作によって物語・人物または思想・感情などを表現して観客に見せる総合芸術である。様々な要素が必要に感じるが、本当に必要なのは俳優、戯曲、観客の3つでありこの3つがあれば成り立つといわれている。特徴としては「演劇はナマモノである」と言われているようにコピーがきかないところである。ではこの特徴はどのように教育するのかを考える。

考えるにあたり、まず現在の状態について調査する。現在の子どもたちは仲の良い限られた集団でのみコミュニケーションを取る傾向がある。これはソーシャル・ネットワークが発達していることが影響していると考えられる。これからは誰とどのような場面でもコミュニケーションを取ることができる能力が必要とされている。演劇教育として近年では国語教材の一部とみなされ教科書に掲載された。演劇はひとつの科目の学びを補助する役割を担うことができると考える。次に海外ではどのような教育が行われているのか調査する。今回はアメリカとイギリスに焦点を当てる。どちらの国でも参加型の学習形態にして専属の先生が存在する。日本とは違い、見せることが目的ではなくプロセスが重要視されている。これらを含めて現代の子どもたちの教育としての魅力はコミュニケーション能力や表現力、集中力、想像力を養うことができたり、疑似体験をすることができる。また、ひとりひとりに役割が存在するため、自分自身を成長させるきっかけを与えることができる。

次に今まで日本で演劇教育は行われてきたのかを調査する。1872年に学制が交付されているが富国強兵の国策に沿って教育も国家主義教育になっていたため演劇は教科として取り上げられなかった。子どもたちのための演劇を『学校劇』と小原国芳が名付けた。1903年には日本で初めて子どもたちのための演劇『お伽芝居』が誕生した。1924年に学校劇禁止令が発令されたが、私立では国による禁止令の影響は受けなかった。1937年ごろから戦争の時代に入っても学芸会は世の中の成り行きに合わせた演劇上演が推奨されていた。しかし戦争が激化するにつれて緊迫した状況では演劇どころではなくなってしまった。1945年に終戦を迎えると全国的に演芸会ブームのような風潮が生み出され、学校劇は学校劇大会や演劇コンクールなどが盛んにおこなわれるようになる。1947年には学習指導要領が発表されて劇という言葉があり、積極的に取り入れることができるようになった。1998の学習指導要領では総合的な学習の時間が設けられ、学芸会や演劇だけではとどまらない創造的な活動が進められている。2020年に新型コロナウイルスの影響によりオンライン授業になったため演劇を取り入れた授業がさらに難しくなった。実際に母校の演劇部にコロナが流行している時期に練習風景を見学しに行った。

最後に学校で実際に行われた演劇教育を受けた子どもたちはどのように感じたのかひとつの論文を読み解き、小学校高学年を対象に実践できそうな練習内容を考えてみた。